10市町の首長ら集い献花

全国ハンセン病療養所連絡協

きょう奄美市で13年ぶり総会

ハンセン病療養所のある市町の代表が納骨堂に花を手向けた＝8日、奄美市名瀬の奄美和光園

全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会の総会が9日、奄美市名瀬で開かれる。総会に先立ち8日、全国に13カ所ある国立ハンセン病療養所が所在する自治体の首長や議会議長など約40人が奄美和光園を訪れ、納骨堂前で献花式を行った。

同連絡協議会の総会が奄美市で開かれるのは13年ぶり。台風接近の影響で沖縄県の名護市と宮古島市を除いた10市町から首長や代表者が一堂に会した。

事務局を務める東京都東村山市の渡部尚市長が「長年の誤った理解と政策で無念にも亡くなった方々に哀悼の意をささげたい。自治体として、ハンセン病について正しい理解を促進すると誓う。総会では今後の方針を定め、ハンセン病の抜本的解決に尽力したい」とあいさつした。

奄美和光園を代表して自治会相談員の牧園忠義さん（92）は「私が強制収容されてから60年以上がたつ。入所者も35人と減り、13カ所の療養所から最初に消えるのは和光園だと思う。国は最後の1人まで面倒を見てくれるといっているが、どういう生活になるかは分からない。将来のことを教えてほしい」と訴えた。

奄美和光園は1943年に設立。現在は56～98歳の35人が入所している。設立以来、379人が死去しており、納骨堂には46人分の遺骨を納めている。献花式では出席者が1輪ずつ花を手向けた。

総会は9日、市内のホテルで開かれる。

身近な自然を体感

西阿木名小・三京分校

児童らが川の生物観察

【徳之島総局】天城町の西阿木名小学校と同校三京分校の児童らは8日、同町の三京川で観察会を行った。箱メガネを使って川の中に生息する小さな魚やエビなどを確認し、身近にある豊かな自然を体感した。

観察会は国営徳之島用水土地改良事業で今年3月に完成した徳之島ダム周辺の環境調査の一環で、九州農政局徳之島用水農業水利事業所が開いた。2012年度に始まり4回目。

三京分校の近くを流れる三京川は徳之島ダムのある秋利神川の支流で、これまでの調査で絶滅の恐れのあるキバラヨシノボリやルリボウズハゼなどの生息が確認されている。

観察会には両校の全児童計13人が参加した。児童らは川に飛び込んで箱メガネで水中を観察。定置網にかかったキバラヨシノボリやボウズハゼ、ヒラテナガエビなどのほか、体長60～70センチのオオウナギに歓声を上げていた。

三京分校5年生の嶺山乙葉さん（10）は「大きなウナギにびっくりした。自然の中にいる生き物は元気ですごい」と話した。

徳之島用水農業水利事業所の渡部光紀調査設計課長は「調査を通じてダム周辺にいろんな種類の生き物がいることが分かった。地元の子どもたちに身近にある豊かな自然を伝えたい」と語った。

川の生き物を観察する児童ら＝8日、天城町

「かもめーる」大作戦

ご当地キャラに暑中見舞い

あまぎくん、中学校でPR

【徳之島総局】天城町のゆるキャラ「あまぎくん」が8日、同町の天城中学校（川畑拓校長、生徒113人）を訪れ、「ご当地キャラ『かもめーる』大作戦」をPRした。生徒たちは全国各地のご当地キャラクターからお気に入りを選び、メッセージやイラストをはがきに書き込んで暑中見舞いを送る。

作戦は、子どもたちに文通の楽しさや素晴らしさを知ってもらい文字文化の向上を図るとともに、各地域の魅力発信にもつなげようと、南海日日新聞社など地域新聞が加盟する「ご当地キャラ『かもめーる』大作戦」を天城中の生徒たちにPRしたあまぎくん＝8日、天城町兼久

全国郷土紙連合と日本郵便などが合同で企画。各新聞社が推薦する9体のご当地キャラ宛てに暑中見舞いを出すと返事が届く。

この日は同校2年B組の21人が丁寧に暑中見舞いをしたためた。順田大聖君（13）は「絵を描いたりして天城町の闘牛をたくさんの人に知ってもらいたい」と話していた。

「かもめーる」大作戦の応募期限は8月7日。詳細は電話0997（53）2126南海日日新聞社営業局広告部。

NIE実践校に545校

日本新聞協会

日本新聞協会は8日、学校の授業など教育現場で新聞を活用する「NIE」（教育に新聞を）の、2015年度実践指定校545校（前年度から23校減）を発表した。

内訳は、小学校228校、中学校187校、高校116校、小中連携1校、中高連携9校、特別支援学校4校。15年度からの新規指定校は239校で、残る306校は継続校となる。

授業などで新聞を活用してもらうため、協会と各新聞社は購読料を補助する。実践期間は原則2年間で、指定校のうち「奨励枠」とした15都道県15校は1年間となる。

また協会とは別に、12道府県のNIE推進協議会が独自に小中高校など59校を認定した。

今年のNIE全国大会は30、31日に秋田市で開かれる。

「生まれ島」が世界遺産に

軍艦島の登録喜ぶ

奄美市名瀬の益田さん

軍艦島の世界文化遺産登録を喜ぶ益田さん＝奄美市名瀬

兄和広さんと一緒の写真。右が益田さん＝軍艦島の住宅

明治日本の産業革命遺産が世界文化遺産に登録されることが決まったことを心から喜んでいる人が奄美にもいる。「軍艦島」（長崎県端島）で生まれ、幼い頃を過ごした益田保雄さん（63）＝奄美市名瀬平田町、元大島地区消防組合＝がその人。益田さんは「軍艦島は戦後日本の復興も支えた。生まれた島が世界遺産になり、幸せだ」と語った。

益田さんの父親・武雄さん（1917年生まれ）は戦時中、中国に出征し、戦後間もなく、引き揚げてきた。鹿児島に着いたとき、古里に電報を打った。「両親とも死去した」ことを知り、帰郷を断念。電柱の募集広告を見て軍艦島の炭鉱で働くことを決めた。

武雄さんはその後、長崎県大村市出身のスエさん（1925年生まれ）と結婚。きょうだい7人のうち、長男の和広さんと益田さん（次男）、三男の茂さんが軍艦島で生まれた。武雄さんは10年近く島で暮らしたという。

炭鉱の労働は3交代制。地下300メートルに空気抗があり、武雄さんは「地上が星のように見えた」と話していたという。作業はさらにその下、地下千メートルで行われた。

労働の厳しさの半面、生活は豊かだった。当初は「水」以外、島には必要な施設は整備され、住民は都会的な暮らしを送っていた。「港に着いてトンネルを抜けると、（巨大な）アパート群が並んでいた。炭鉱労働者は社用族と呼ばれていた。自宅には電気蓄音機やミシン、大きな柱時計もあった」（益田さん）。

武雄さんその後、炭鉱で落盤事故に遭い、2、3日意識不明の重体になった。武雄さんは「戦争で助かった命を炭鉱で落とすわけにはいかない」と退職を決めた。家族は1955年、島を離れ、奄美大島に戻った。

炭鉱が閉山する前年（1973年）、家族で軍艦島を訪ねた。益田さんが「今、島に行かないと二度と行けなくなるかもしれない」と提案したことがきっかけだった。家族が街を歩いていると、「益（益田）さんじゃないか」と、次々に声を掛けられた。益田さんは「写真を撮る暇もないほど、歓迎を受けた」と振り返る。

今回の世界遺産登録を機に、増田さんは再び軍艦島を訪れることにしている。自分と家族の足跡をたどるためだ。益田さんの思いは奄美にも及ぶ。「文化遺産と自然遺産。生まれた島と暮らした島が世界遺産になるなんて、こんな幸せ者はいない」と、奄美の世界自然遺産登録を心待ちにしている。

▽メモ　軍艦島の炭鉱は江戸時代の後期に発見された。1890（明治23）年、三菱合資会社が島全体と鉱区の権利を買い取り、海底炭鉱として本格的な操業を開始。最盛期には5千人以上も居住し、高層アパートが次々と建設された。エネルギー需要が石炭から石油に転換するとともに、出炭量も減少。1974年に閉山した。軍艦島を含む全国の8県23施設で構成する「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は5日、世界文化遺産登録が決まった。

産業革命遺産、一覧に記載

ユネスコ委が閉幕

ドイツ・ボンで開催中の国連教育科学文化機関（ユネスコ）世界遺産委員会は8日、「明治日本の産業革命遺産」（福岡など8県）を含む27件を新たに世界遺産一覧表に記載した。委員会は6月28日（現地時間）からの全日程を終え閉幕した。

今年の委員会では、文化、自然、複合の3分野で計36件の候補を審査。産業革命遺産を含め24件（文化23、複合1）の新規登録を決めたほか、3件の登録範囲拡張を認めた。世界遺産の総数は1031件、日本の遺産は19件（文化15、自然4）になった。

文化庁によると、来年の委員会はトルコ・イスタンブールで7月10～20日に開かれ、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（長崎、熊本）が登録審査を受ける。